

# 逗葉高校の授業（古典）実施報告

本校の「学校へ行こう週間」である10月25日（水）、神奈川県立総合教育センターへの講師派遣を依頼し、古典装束の一つである「狩衣（かりぎぬ）」の着付体験をしました。

体験した生徒は午前・午後2クラス計50名でした。「殿」と呼ばれる、衣裳を着せられる役割の生徒の準備が整うと「衣紋者（えもんじゃ）」と呼ばれる、衣裳を着せる役割の二人による着付が始まりました。



【襦袢（じゅばん）を付ける】



【単衣（ひとえ）を付ける】

引き上げ式の指貫（さしぬき）は、浅葱色（あさぎいろ）の八藤丸（やつふじのまる）文様。単衣は、萌黄色（もえぎいろ）の繁菱（しげびし）文様。狩衣は、紫苑色（しおんいろ）の雲鶴丸（うんかくのまる）文様です。



【狩衣を付ける】



【烏帽子・浅沓・蝙蝠扇を付けた姿】



### 【着付の様子を見守り、説明を聞く生徒・来校した保護者】

着付終了後は、平安時代の服飾に関する質疑応答や文学作品にみられる衣裳の講義を「まとめ」とし、最後は記念写真撮影で終了しました。以下は「着付体験を終えて」のふりかえりアンケートです。

#### 《「殿」の感想》

●靴下みたいな「襪（しとうず）」を履いた時、心地悪さを感じた。襦袢を着た時は肌ざわりが良いなと思った。単衣を着た時はズシッと感じて動きづらくなった。狩衣を着ると今迄に着た物のことを忘れるほど重かった。けれども一番違和感があったのは浅沓だ。あの衣裳で狩猟に行くなど考えられない。

#### 《「衣紋者」の感想》

●着物とは違って、細かいところは細かいし、着る物がいっぱいあってびっくりしました。良い体験になりました。また、フリーサイズだから、その人によってサイズを合わせられるので、よく考えられて作られているのだと思いました。

●狩衣が一番動きやすい服だったなんて信じられないくらい動きにくそうだった。帯でぎゅっと絞められたり、何枚も着たりして、息苦しくなりそうだなと感じた。前衣紋者と後衣紋者で着付をしたが、前衣紋者より後衣紋者の方が大変だった。特に狩衣を着せるときに、五本の指で挟むのは難しかった。

#### 《「観客」の感想》

●着る人は全て身につけると重くて大変だと思うけれど、着付ける人は服をそろえて、殿を気遣って袖の通しやすいうように工夫したりなど大変だと感じた。着る順番や着る物の名前など全てが決められていることが改めてわかった。

●今と違って、時間もゆっくりと流れていた中なので、色合いや座っても美しく見せられるように作られていて、時代を想像しながら話を聞くことができました。

●昔の服はデザインがとても繊細で優雅だと思いました。また、服の作りや服の着せ方にも工夫がたくさんあり、次の世代に受け継がれるくらい丈夫に作られているのだとわかりました。昔の人は知恵をたくさん持っていたのだと思いました。

●烏帽子（えぼし）は一日中ずっと被っていて、寝ている時でもとらないということにすごく驚いた。寝ていても気が抜けないなんて大変だと感じ、同時にうっかり烏帽子が外れてしまうことはなかったのかなと思った。指貫や単衣、狩衣、蝙蝠扇（かわほりおうぎ）の色を考えて着ていたと聞いて、昔の人もお洒落を楽しんでいたのだなとわかった。そして、服や浅沓（あさぐつ）はワンサイズだけでびっくりしたし、服のサイズは紐とか丈とかで調節できても、浅沓の調節はどうやってするのだろうと思った。

逗葉高校では、生徒の「深い学び」に繋がる体験学習を授業に取り入れています。